

松下幸之助に学ぶ!!

文・全国PHP友の会

会友 梶浦 洋一

(徳島PHP友の会顧問)

(H/PHPAG&

『菜根譚の会』世話人)

『故きを温ねて新しきを知る』

第四回



最近、複数の政府、与党関係者から情報として、安倍首相は、夏の参院選に合わせて衆院選を実施する『衆参同日選』の可否を検討し、5月に判断の意向を固めた模様と

また、来年4月に予定する消費税率10%への増税先送りも視野に入れて、世界経済情勢を見極めつつ5月下旬の『伊勢志摩サミット』前後に結論を出そうとしている模様だ

アベノミクス第3の矢がどの辺を飛んでいるか定かではないが、各種の選挙を念頭に、いよいよ各政党間の駆け引きが盛んになってきた。

また、米国の大統領選出への予備選挙の動きも通常とは異なり、予想以上の新たな波のうねりを見せてている。百年、戦争をし続けた20世紀を終え、愚かな争い事に厭いで【心豊かな21世紀づくり】へ進む新たな波動なのであろうか。

真の繁栄・平和・幸福を究めるために②

さて、先月からの話に移ろう。

私は幸之助さんがそうされたように、このご恩を社会に返さなければいけない、と思うようになりました。年々、強くなるその思いをさまざまに形で実現させようと取り組み始めた頃、ご縁がありま

りました。年々、強くなるその思いをさまざまに形で実現させようと取り組み始めた頃、ご縁がありま

アチーブメント株を創業した青木仁志氏の話は続く。

理念研究本部長という知己を得ることができたのです。

悌二郎さんは日本における松下幸之助研究の第一人者です。私は無理を承知でお願いし、悌二郎さんから幸之助さんの考え方を教えていただくことになりました。

幸之助さんの考え方を吸収して、一歩でも幸之助さんに近づきたいと思つたからです。

この対談は三日間にわたりて行われたものです。悌二郎さんからじかにうかがう幸之助さんの言葉は私の魂を震わせました。

私の人生を振り返ったとき、この燃えるような三日間は間違いなく人生の大きな気付きを得たターニングポイントになるでしょう。

この本を通じて幸之助さんの哲学の真髄が少しでもわかりやすく皆さん的心に届くことを願つてやみません。

アチーブメント株式会社代表取締役社長 青木仁志

悌二郎専務取締役・経営

これを受けての佐藤悌二

ませんでした。

郎氏（筆者注釈）¹¹佐藤悌二郎氏は2011年9月～12月に徳島P.H.P.友の会が開催した松下幸之助に学ぶ『道は無限にある』4会合シリーズセミナーの主要講師を務めて下さった方¹²の話は書籍の【おわりに】に次ぎのよう記されている。

昭和五五年にP.H.P.研究所に入社した私が、一週間の導入教育のうちに配属になったのは研究本部というところで、創設者松下幸之助の研究をする部署でした。爾來三五年、途中半年ほど、幸之助が日本と世界のよりよい姿を実現するために発足させた政策研究提言機構「世界を考える京都座」の運営の手伝いをした以外は、一貫して研究本部で、幸之助の事績や経営観・人間観などの研究と、幸之助に関する書籍・テープ集などの編集・制作に携わつてきました。まさかこれほどまでに松下幸之助と長く深く関わることにならうとは、当初は夢にも思つてい

ティー・カンパニー』の推薦文をというお話があり、

で、青木さんが私を「松下幸之助研究の第一人者」と、過分な評価をしてくださっていますが、三五年もやつていればそうならないほうがおかしいわけで、取り立てて誇るべきことではありません。しかし一方では、

まだ未熟であることをほかでもない本人がいちばんよく知っていますので、そんな者を、数千人の経営者を指導し、尊敬を集めておられる青木さんが評価して、何かとお声をかけてくださるのはたいへん光榮であるとともに、とても面映ゆく、恐縮するばかりです。

青木さんはひょんなことから知り合い、その後折々にそのお考えやお人柄に接してきました。そのなかで、青木さんがいかに松下幸之助を敬愛し、幸之助のもの見方・考え方をご自分の経営に生かそうとされているかということがよくわかりました。

そうしたところ、青木さ

私の推薦などものの役に立たないと思いましたが、ぜひにということでしたので、『現代の松下幸之助といえど誰ですか?』とよく聞かれる。最近になって、私の中ではとみに青木仁志氏こそ、その人ではないかとい

う確信に近づいている」という推薦の言葉を書かせていただきました。

その推薦文が新聞広告に出たとき、「ここまで言つていいんですか。本当にこれ佐藤さんが書いたんですか」と、弊社の社員の何人かが言つてきました。「そんなに軽々しく松下幸之助の名前を出していいのか」というわけです。しかし、私としては、それまで青木さんからお考えや思いをうかがい、ゲラを読ませていただいて、率直にそう感じたのです。

その思いは、青木さんが、幸之助をもっと学びたいとおっしゃって始まった勉強会を通してさらに強まりました。毎月三時間、一対一

で幸之助のことについて質問を受け、お答えするなかで、さきの文言は変更する

で、さきの文言は変更する使命としている私にとりましても、またP.H.P.研究所、松下幸之助、さらには日本の経営者やビジネスパーソンにとりましても実にありがたく、心強いことだと、感謝せずにいられません。

実際、青木さんは、社員の幸せを何よりも考えておられるところ、人を大事にし、人づくりを第一にもつてこらえているところ、「理念経営」を標榜し、その重要性をつとに強調されていました。

そのところ、高い志、崇高な経営理念を堅持しておられるところ、決してもうこれでいいと思わず、学ぶ姿勢をずっともちつづけておられるところなど、その行き方・考え方が幸之助ときわめて近く、重なるところが数多くあるように思います。このたびのハワイでの対談においても、青木さんは幸之助の志と理念の具現者であると確信することができました。そして、ここまでも松下幸之助に私淑し、幸之助を日本の若い経営者の方々にもつと知つてもらわないといけないと率先して話題にされる青木さんのようにおられることは、

幸之助の考え方を研究し、それを世に伝え、広めることを使命としている私にとりましても、またP.H.P.研究所、松下幸之助、さらには日本の経営者やビジネスパーソンにとりましても実にありがたく、心強いことだと、感謝せずにいられません。

本書のタイトルにある“希望の哲学”という言葉は、私が研究本部で仕事を始めて数年たつたころに、幸之助の資料を収蔵している資料室で、ある先輩の研究員がP.H.P.社員の理念勉強会で講義した原稿の中でみつけたものです。これを目にしたとき、松下幸之助といふ人との思考法、P.H.P.理念の根拠を最も的確かつ端的に表現したものに思われ、以後、拳拳服膺してきました。今回の書籍化にあたってタイトルをどうするか青木さんと話しあつていたところ、これがいい、となつた次第です。

（つづく）